
化け猫伝説

蒼海颯爽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

化け猫伝説

【Nコード】

N3609Y

【作者名】

蒼海颯爽

【あらすじ】

超のつく名門の西松侯爵家。その西松家始まって以来の最悪の出来事が起ころうとは誰もが予想出来なかった。

まさか・・・

「それって本当なの、純恵。」

西松国子は黒田純恵に尋ねた。

「残念ながら本当のことです。私が父に尋ねると父は必死に隠していたのですが観念して教えてくれました。」

純恵は続ける。

「私の母が西松の出でそこから聞いたのでしょうかこのことは分家とはいえ西松の娘である母すら知らないことにしているらしいから」

「えっ！娘にすら知られてはいけないってそこまで危険な・・・うん、」

事の恐ろしさを国子も理解したのだった。

「ところで若君様はまだ戻っていないのですか？」

「もうすぐ戻ってくるけど何か？」

「この事はお国さん、いや御住居様や若君様、いや西松の未来がかかっています！」

「それは純恵から言われなくてもわかったいるわ。でもそんなにするなんて」

「・・・実はこの事は西松の祖父母も関わっているらしいのです。だから娘である母に必死に隠して知らない存ざないをひたすら主張しているのです。」

「でも外孫のあなたがそこまでしなくてもいいでしょう」

「西松の祖母は宗家の娘。その祖母が甥である御当主様に影響を及ぼさないわけがないですよ。それにお国さんや若君にもしものことがあつたら・・・」

と純恵は泣き出してしまった。

「私の血の半分は西松でできています。それも枝葉とはいえ宗家の血も引いています。それに取り返しのかからないことになったら西松

はおるか黒田の御先祖様にも顔向けできません。だから命をかけてでも食い止めないといけません！ですから次期侯爵夫人になるお国さん、いえ御住居様の力が必要なんです！」

「純恵・・・」

国子は何もいうことができなかった。

その頃、国子の夫で西松侯爵家嫡男の正直は浮かれ気分で帰り道を歩いていた。

「ようやくテストが終わってしばらく勉強が必要ない♪点数は・・・考えたってしょうがないでしょう（笑）」

テスト勉強から解放された正直にテストなんか遙か及ばない地獄が待ち受けているとは正直は露も知らなかったのだ。

まさか・・・（後書き）

登場人物

西松国子（18）・・・聖徳公爵家（宗家）の娘で3年前に正直に嫁ぐ。通称御住居様。

黒田純恵（17）・・・黒田男爵の長女。国子の後輩でもある。

西松正直（15）・・・国子の夫で西松侯爵の嫡男。3年前にわずか12歳で国子と結婚する。年齢からわかる通り政略結婚で2人の年齢もあつてか当初はぎこちなかったが正直が成長して同衾するようになってからはそれなりの夫婦関係になった（さすがに12歳少年にセックスは無理ぽ）。

西松元昭（20）・・・西松子爵の長男。西松侯爵の命でその娘、つまり正直の姉と結婚する。

西松直孝（17）・・・ただの西松一門と思いきや西松侯爵の庶子、つまり正直の異母兄である。

西松公茂（19）・・・西松侯爵の弟。

三浦登子（25）・・・西松侯爵の長女（妾腹の姉がいるので厳密には違うのだが）で三浦子爵夫人。実家に入り浸りだが国子の存在を脅威に感じている。

西松侯爵（49）・・・正直の父で名門西松家の当主。浮気男で正直の異母兄弟が沢山いることで有名だが純恵によるとそんなことよりとんでもない悪事をしかしているらしい。

西松侯爵夫人（41）・・・正直の母で宮坂伯爵令嬢にして西松侯爵夫人で大学の助教授である。侯爵夫人ではあるものも実際は家庭内別居であり宮坂幸子という名前（つまり旧姓）で教鞭をとっているほどである。幼い頃生母に死なれて父の後妻と不仲である。

西松男爵（60）・・・西松家の分家の当主。長女が黒田男爵に嫁

ぎ純恵などが生まれる。

西松男爵夫人（50歳ぐらい？）・・・先々代の西松侯爵の娘。先代の異母妹。

黒田男爵（40代）・・・純恵の父。

黒田男爵夫人（30代）・・・西松男爵の長女で純恵の母。

聖徳公爵（56）・・・聖徳宗家の当主で三回の結婚で儲けた子供たちの他に婚外子が沢山いる。

平松隆子（53）・・・平松公爵の姉で聖徳公爵の二度目の妻で国子の生母。当初聖徳侯爵の妻だったが妊娠中に夫は死亡。その後息子を産むも援助を求める形で公爵令嬢でありながら聖徳公爵の愛人になり最初の夫人は家出。隆子は妻になり国子達を産む。しかし中山美代子に妻の座を奪われ幼い国子たちを置いて家を出たのだった。聖徳美代子（40）・・・中山伯爵令嬢で聖徳公爵の三度目の妻。持ち前の美貌で隆子から公爵を奪い三度目の妻になる。伯爵令嬢とは思えないほどの性悪女で継娘にあたる国子たちを虐める（国子の男兄弟には一切手を出さない）。

西松市西松区

西松侯爵別邸。そこには嫡男である正直と夫人である国子が住んでいた。

あるひ国子が学校から帰宅すると後輩の純恵からメールが入っていた。

驚いた国子はすぐに純恵に電話したのだった。

純恵との電話を終えると国子はうなだれる。

「この西松家の一大事、何とか出来ないのだろうか」

考えても答えは出てこない。気がつくとな夜になっていた。

ところ変わって西松市西松区の超高層マンションの最上階。ここに住む西松直孝はやはり悩んでいた。

「中山でこんなことが行われていたとは・・・」

そういうとトランクに荷物を詰め込んだ。

「こりゃ長期戦になりそうだな」

直孝はインターネットで往路のみの飛行機を予約したのだった。そして直孝は家を出る。

西松市西松区（後書き）

中山市・・・世界最大の都市にして首都である。正直や国子たちが住んでいるところである。

西松市・・・中山市より遙か西にある人口200万人超の政令指定都市である。元々西松家の領土であり直孝が住んでおり元昭の実家がある。

西松市だよ

西松直孝、１７歳。西松一族である西松緑子の私生児として西松市に生まれる。

緑子は女手一つで直孝たちを育てていたが西松市随一の超高級クラブのホステスでもあったので経済的に不自由はなくいわゆる億ションをキャッシュで購入するほどだった。

そして緑子の子供の父親は・・・西松侯爵であった。

その昔侯爵が西松に来たとき、西松一族の娘として緑子は接待したのだったがその晩、緑子は侯爵が泊まる部屋に呼び出されたのだった。

翌年、侯爵が再び西松に来たとき乳児を抱いた緑子がいたのだった。しかし侯爵は驚く様子はなく緑子は逆に戸惑ったが再び部屋に呼び出されたのだった。

数年後、緑子は意を決して西松子爵の上京に同行したのだった。２人の幼児を連れて。

しかし正妻がいる以上緑子は侯爵邸に入るのはためらったのだった。そして緑子は同族の母娘を紹介される。

そして娘の顔を見るなり緑子は驚く。何と緑子の子供と顔がにているのだった。

そして自分と同じ立場の母子が沢山いることを緑子は察するのだった。

緑子は西松女子大学卒業後大手企業の西松支店に父親の名前を書いて入社した典型的なコネ令嬢であったが未婚のまま妊娠してしまつたため逃げるように会社を辞めて実家からも出て出産したがさすがに生活が苦しくなつたため夜の商売に足を踏み入れたのだった。

緑子は侯爵に会うことに成功したが場所はラブホテル。その後西松

に戻った緑子は9か月後に3人目を出産することになったのだった。直孝はある人物の元を訪ねる。その人物は西松元昭子爵である。ところ

が

「あいにく元昭はまだ帰ってきていないのです。」
と元昭の母堂は直孝に謝ったのだ。どうやら飛行機が遅れているらしい。自分から呼び出しておいて何事かと直孝は憤慨したのだった。母堂は直孝にお茶を出しながら、

「私も今日初めて聞いたのでよくわからないのですが例の件でしょう。」

「そうです。」

「それで元昭を中山から呼び出したのですが・・・」

「ですが？」

「このことは私たちが考えるより遥かに根の深い問題で」

「はい、それで夏休みに入ったらひとまず上京して調べようと思います。」

「それで私も上京したいのですがあいにく介護があるので西松を離れられないので元昭やあなた様に調査をお願いします。」

「わかりました。」

「ところで緑子さんはこの事をご存知で？」

「いえ、母は知らないと思います。おそらく姉や妹も知らないでしょう。」

その時、元昭が帰ってきた。

「昭ちゃん、待ってたぞ」

直孝はそういったあと、急に表情を変えた。

「千鶴子さんと直孝さんが同じ場所にいるのはまずいわ・・・」

元昭の妻千鶴子は侯爵の正妻の娘で直孝は侯爵の妾の息子。しかも二人は同じ年。母堂は後悔したが後の祭りだった。

子爵邸に真夏のはずなのに冷たい空気が流れる。母堂は次にどう動けばいいのか必死に考えた。

西松市だよ（後書き）

西松緑子（おそらく40代）・・・西松一族の出身で西松侯爵に召されて直孝など一男二女を産む。

故西松子爵夫人（40代）・・・別の西松子爵家出身で故子爵に嫁ぎ元昭などを産む。

西松千鶴子（17）・・・西松侯爵と夫人の娘で正直の同母姉。3年前国子が嫁いでくる直前に元昭に嫁ぐ。

西松市の・・・

「あの件については千鶴子さんもご存知？」

「はい、三浦の姉から聞いております。」

「それで登子さんはどのようにおっしゃっていたの？」

「申し訳ないのですがどうやらうちの父が関わっていると・・・」

「でも黒幕は他にいるんじゃないの」

「西家とか東豊家とか中山家とか・・・（分家の名称ですべて西松姓）」

「なんか大変なことになったわね」

「何を今更」

4人はそう夕食をとっていると母堂は立ち上がり

「忘れてた！」

「何を？」

「2人の熱い夜を彩る準備よ」

母堂が真顔で言うので3人が困惑していると

「いつかこの手に孫を抱ける日を待っているわ。それが亡き主人の願いでもあったの」

そう千鶴子のうしろで呟いた。

「孫なんて姉貴のところにいるじゃん」

元昭が言々と母堂は元昭のうしろで呟く。

「不妊の原因は男女半々。もし何かあるなら病院探すから」

実は学生の2人は避妊をしていたのだがそんなこと母堂に言えなかった。

「ところで直孝さんご結婚の予定は？」

「今は彼女すらいません」

その言葉に母堂はにやりとする。

「だったらうちの娘はどうかしら」

「母さん！」

元昭が怒ると母堂は平然と言う。

「主がない家にこれ以上娘はおけないわ。本来なら元昭の結婚前に全員嫁に出すべきだったのよ。現に宗家では若君様の結婚時に千鶴子さん含むお嬢様方が全員嫁に出されたじゃない。それに父親が生きているうちなら高く売れただろうし」

「売れたってまるで置屋の女将のような発言だな」

「置屋の女将ってさすがの私でも宗家に献上することはないわ」

「昔の時代じゃあるまいし・・・それにうちでは側室として身分が高すぎる」

「・・・献上されたうちの母はどうなんでしょう」

「それは現侯爵様があちこちに・・・」

西松市の・・・（後書き）

元昭の母堂（名前未定）、トンデモ母だな（義母としても実母としても）

まあ夫が亡くなり経済的にも精神的にも苦境に立たされていて暴走気味になっているんだけど（笑）

肝心の件については“本当の”黒幕は別にいるんだっただの・・・

所変わって

所変わって中山市渋谷区。国子が正直の帰りを待っていると来客があった。

「まーちゃんじゃない・・・」

国子は残念そうに玄関のドアを開けると正直の姉の三浦登子と渋谷姚子と池澤夏子がいた。国子はこの三人がどうも苦手だった（弟嫁の立場なので当然だが）。

「まーちゃんはいる？」

「正直はまだ帰っていないのですが・・・」

「もしかして西松の誰かのところに行くといっていないかった？」

「何もおっしゃっていませんでしたのですがもしかして例の件ですか？」

「既に国子さんの耳にも届いていたとは・・・」

「いや、宗家の嫁として知らなきゃまずいでしょう」

「とりあえずあがって下さい」

「それで西家と東豊家と中山家がお義父様をそそのかしている？」

「はい、まだ他にもあるようで」

「私が聞いているのは錦家なんですか・・・」

錦家は純恵の母の実家である。

「錦家！あの大叔母（純恵の祖母）ならありうる！」

「うーん・・・私、昨日圭子と和美（ともに純恵の叔母）に会ったけど特に変わった所は無かったわ」

「まさか圭子ちゃんと和美ちゃんが加担しているというの？！私は信じないからね！そんなこと」

「いや、そういうことじゃなくて圭子と和美は何も知らなさそうということで・・・」

「私が黒田純恵から聞いた話だと純恵のお母様は錦家内では知ってはいけない立場になっていて知らないふりをしていて、また純恵は

この事に罪を感じているらしくて・・・」

「陽子さんが知らないふりをしているなら妹の圭子ちゃんや和美ちゃんも知らないふりをしているかも知れないわ。しかし娘ならいざ知らず外孫の純恵ちゃんにまで罪の意識を植え付けるなんて酷すぎる！」

「まあムキにならなくても・・・」

その時、ようやく正直が帰宅した。

「あれ？姉ちゃんたちどうしたんだ？」

「（まさかまーちゃん知らない？）」

4人は一番知っているべき正直が知らなさそうなので不安になったのだった。

所変わって（後書き）

渋谷姚子（24）	・ ・ ・	西松侯爵と夫人の次女。	渋谷伯爵家に嫁ぐ。
池澤夏子（22）	・ ・ ・	西松侯爵と夫人の三女。	池澤子爵家に嫁ぐ。
西松圭子（24）	・ ・ ・	錦家の西松男爵の四女。	純恵の叔母。
西松和美（18）	・ ・ ・	錦家の西松男爵の五女。	純恵の叔母。

西松邸

「こんな時間に一体何を・・・」

「まさかあんた、何も知らないわけ？」

「知らないって何を」

「なるほど、そういうことか」

「それで千鶴子が今西松の江北家（元昭の家）に行っているの」

「西松に行って何かわかるんだろうか・・・」

「どうやら奥様に呼び出されたらしいよ」

その時、電話がなる。

「一体誰なんだろう」

正直はとりあえず出ることにした。

「はい、西松です」

「もしもし、正直？俺だよ公茂だよ」

「いや、わかってるって公茂さん」

公茂の名前に正直の姉たちは反応した。

「今の電話公茂なの？」

「そうだけど」

「今の電話私たちにも聞こえるようにして！」

正直はとりあえずスピーカーのボタンを押した。

「それでどうやら本当の黒幕は兄上の愛人のようなんだが」

「まさかその愛人が自分の子供にあとを継がせたいためにやったこと？」

「それが、その愛人、帝の妾で何百年か先の未来からやってきたというんだよね」

「何なのその電波女」

「それで正直と国子さんとの間の子孫であるババアの孫に宇宙征服

を阻まれて命からがらこの時代にやってきたらしい」

「ますます電波・・・」

「しかし子孫の孫ってどういうわけなんだ」

「何でも子孫のババアが西松侯爵家の出で孫は娘の子供らしい」

「でも何でこの時代に？」

「詳しくはわからないけど帝の妾が生まれる少し前の時代だかららしい」

「何で少しあとに生まれる人が何百年後まで生きているんだよ」

「それは門外不出の企業秘密らしいよ」

「らしいらしいってどれも不確かなわけ？」

ここににいる全員が公茂の証言に困惑した。

翌日正直と国子は爆睡している公茂を横目に眠い目をこすりながら登校した。

「大学は毎日8時半に登校しなくてもいいからいいよな」

「でも今日で1学期も終わりだね」

中3の正直と高3の国子は部活も引退してエスカレーター式に進学がほぼ決まっているので受験勉強の必要がなく暇人だったが事情が事情のため暇人じゃいられなくなっていた。

国子は純恵に会う。

「それで侯爵様のあらたな愛人が戦犯で何百年先の未来からきたということなんですか」

「本当かどうかわからないけど私の子孫に宇宙征服を阻まれてこの時代にきたらしいよ」

「宇宙征服って正気？」

「さあ、でも帝の妾だったらしいよ」

「なんか突拍子すぎて作り話より酷い・・・」

そんな中正直は学校である情報を手に入れる。

「実はさ俺の親父、愛人が出来たらしいけど、その女何股もしてい

て西松侯爵もそのうちの一人なんらしいよね」

同級生で森内侯爵の長男の森内長肅が言う。

「それで俺の顔を見た瞬間、若い頃お前の娘に亡き者にされそうになったけど逆に始末してやったと言っわけ。」

「念のために確認するけどお前、子供いないよな？」

「おい、この俺様に隠し子がいるっていうんじゃないよな」

「冗談だよ（笑）。それであの女は未来からきた帝の妾って言張るのは知っているか？」

「何それ、知らない・・・待てよ、ということは俺の娘は中宮になるのか？だとすると俺は帝の祖父。まことに御光栄な話だけど俺本人に結婚のけの字もないのに何とも非現実すぎる」

「でも娘は始末されるんだよ」

「それだけは絶対嫌だ！」

「まあ、未来のことだし・・・」

西松邸（後書き）

森内長肅（15）・・・森内侯爵の長男。正直の同級生。

森内長賢侯爵（52）・・・名門森内侯爵家の当主。西松侯爵とは
穴兄弟？

森内織子（49）・・・森内侯爵夫人で長肅の母。喬子の姉。

聖徳喬子（34）・・・国子の異母兄の聖徳公爵嫡男夫人。織子の
妹。

前田偕子（16）・・・国子の異母妹。前田侯爵嫡男夫人。母は美
代子。

聖徳貴子（12）・・・偕子の異母妹。母は美代子。かなりのやり
手。

未来からきた帝の妾と主張する女・・・西松侯爵家出身の女性とそ
の孫によって宇宙征服を阻止されてこの時代にやってきた。今の時
代の何十年かあとに生まれる。

中宮森内氏・・・長肅の娘。帝の妾によって殺害される。

某夫人西松氏・・・西松侯爵家出身で正直と国子の子孫。

今上帝（28）・・・時の帝。名前は神武斉尊。

中宮香淳氏（26）・・・帝の妃。名前は神武昭子。帝との間に三
皇女がいる（つまり東宮不在）。

未来キャラの設定は既に決まっているのだがこの小説では設定をあ
やふやにしています。

聖徳公爵邸

その日、国子は実家の聖徳公爵邸に行った。

「用がすんだら早く帰れ」

公爵の後妻美代子は渋々国子を公爵邸に入れた。

「ご主人様、西松の国子様がご主人様に御用件があるということでお越しになりました？」

あからさまに違う態度に毎度のことながら霹靂した。

「失礼します」

「おお、国子か。待つておったぞ」

「お父さん、実は・・・」

「何だ西松の件についてか。あの程度の粉飾決算なんてどこでもあるから気にすることはないぞ」

「ふ、粉飾決算？」

予想外の答えに国子は驚愕した。

「何だ、違うのか？」

「私が聞いているのは横領と愛人騒動で・・・」

「それは初耳だ。まあどちらにしてもあまり気にすることはないぞ」公爵はあてにならなかつたので国子は早々と公爵邸をあとにした。続いて国子は兄が住む別邸に行った。

「あいにく主人はまだ帰宅しておりませんが」

兄嫁の喬子は申し訳なさそうに答える。

「とりあえず上がってもよろしいですか。」

国子が居間に通されると喬子の姉の森内織子と清水幸子がいた。

「何か私、お邪魔したようで・・・」

国子は兄の家をあとにしようとした。

「待つて、国子さん！」

国子は織子に引き止められた。織子の顔は完全に憔悴していた。

「それで、森内侯に愛人が出来て森内家を牛耳ろうとしていると？」

「はい。それでその愛人は西松侯や柏原侯とも関係を持つているのです。それでその愛人は長肅の顔を見るなり“若い頃お前の娘に亡きものにされそうになったけど逆に始末してやった”と言うの。」

「肅君ってまだ中学生のはずじゃ・・・」

「その愛人、何でも未来から来た帝の愛人で私の子孫の女性とその孫に宇宙征服を阻まれてこの時代にやってきたらしいです」

国子の突拍子もない発言に通常なら驚くはずが長肅の娘の存在によって何も驚かなかった。

「そう。それであの女いわく森内家でも柏原家でも、西松家でもなくて本当は鹿島家が狙いだったらしいの」

「なぜに鹿島家？」

「鹿島公はまだ二十歳そこそこで若すぎだからじゃないかしら」

「いや、私が言いたいのはなぜ鹿島家がターゲットなのか」

「鹿島家は臣下で最高の家柄じゃないからかしら」

「うーん、何か違うような」

「ところで国子さんの子孫の女性、どこに嫁いだのかしら？」

「そこまでは聞いていないです」

「もしかして鹿島家に嫁いで生まれた娘が中宮になって孫が帝かもしれないわ」

「ありえなくもないけど中宮とは一言も言っていないわ」

「となるとお上の息子が孫に織子姉さんの孫娘が中宮になって生まれた息子が柏原家から中宮を迎え更に生まれた息子が西松家出身の母を持つ鹿島さんを中宮に迎え生まれた帝に未来時代を終われたということ？」

「それがその女、何百年先の未来から来たらしいのですから」「えっ！」

ここにいた全員が驚いた。

「えっと肅君の娘が数十年後に生まれ１００歳の時愛人が２０歳で、

それでも精々160年ぐらいしか経たないわ」

「待って、あの女は一瞬で長肅を見分けられたのよ。となると少なくとも長肅とは面識があるわ」

「でも人間が何百年も生きられないし、それにその愛人何歳ぐらいだった？」

「多分私より若いと思う」

「なんかいろいろ矛盾が・・・」

「でも時空を移動できるぐらいだから不老不死なのかもしれないよ」
とにかく訳がわからなくなった。

聖徳公爵邸（後書き）

清水幸子（47）・・・故清水公爵夫人。織子の妹で喬子の姉。

柏原侯爵（40代）・・・女の愛人の一人。

夏休み初日

国子が帰宅すると沢山人がいた。

「それで聖徳宗家で何かありましたか？」

「わかったことは粉飾決算と森内侯と柏原侯と穴兄弟ということと森内侯の孫が中宮になることぐらい、それとあの女の年齢がさっぱりわかんない」

「あ、穴兄弟・・・」

「いくらなんでもストレートすぎますよ」

「その粉飾決算だけど横領の資料が倉庫にあるらしくて・・・」

「それで？」

「それに厚子の旦那も関わっているらしいよね」

厚子は正直の姉であるが実は知的障害を持っていた。しかし国子が嫁いでくる前に無理矢理20歳も年上の一族の西松茂治の後妻にされたのだった。

なぜ後妻にされたかというと茂治は借金まみれで借金の肩代わりのために厚子を押し付けられたのだ。

とりあえず正直邸にいるのは

西松正直（15）・・・略

西松国子（18）・・・略

黒田純恵（17）・・・略

西松公茂（19）・・・略

三浦登子（25）・・・西松侯爵の長女で正直の姉。三浦子爵夫人。

渋谷姚子（24）・・・西松侯爵の次女で正直の姉。渋谷伯爵夫人。

池澤夏子（22）・・・西松侯爵の三女で正直の姉。池澤子爵嗣子

夫人。

池澤実同（27）・・・池澤子爵嗣子で夏子の夫。

池澤祐子（6）・・・夏子と実同の長女。

池澤令子（5）・・・夏子と実同の次女。

池澤公晃（1）・・・夏子と実同の長男。

近藤益子（18）・・・西松侯爵の五女で正直の姉。近藤伯爵夫人。

西松茂明（13）・・・西松侯爵の次男で正直の弟。

西松公前（16）・・・公茂の同母弟。

西松直与（21）・・・西松侯爵の甥で正直の従兄。子爵。

西松遂子（25）・・・直与夫人で平松公爵の妹で国子の母隆子の妹でもある。

西松直紀（1）・・・直与と遂子の長男。

西松与善（18）・・・直与の弟。

西松温子（14）・・・直与の妹。

黒田智枝（15）・・・黒田男爵の次女で純恵の妹。

黒田智之（13）・・・黒田男爵の長男で純恵の弟。

森内長肅（15）・・・森内侯爵の長男。

新発田歌子（30）・・・森内侯爵の次女で新発田伯爵夫人。

村松益子（23）・・・森内侯爵の五女で村松侯爵夫人。

西松晴子（18）・・・森内侯爵の七女で西松子爵夫人。

聖徳義朝（37）・・・聖徳侯爵（名古屋）。国子の異父兄。妻は国子の異母姉鎮子。

松竹達子（26）・・・聖徳公爵の五女で国子の異母姉。松竹侯爵（福井）夫人。妊娠中。

松竹浅子（3）・・・達子の長女。

松竹幸子（21）・・・聖徳公爵の六女で国子の同母姉。松竹伯爵（若松）夫人。

松竹結子（20）・・・聖徳公爵の七女で国子の同母姉。松竹伯爵

（香川）夫人。妊娠中。

松竹頼熙（3）・・・結子の長男。

松竹頼揚（2）・・・結子の次男。

松竹郁子（1）・・・結子の長女。聖徳宗莊（19）・・・聖徳公爵の四男で国子の同母兄。聖徳侯爵婿養子。

清水操子（16）・・・聖徳公爵の九女で国子の同母妹。清水公爵養子夫人。妊娠中。

清水元広（15）・・・清水公爵の養子で先代の長男（この時代の清水公爵家は相続が複雑になっている）。母は正直の母方の叔母なので正直の従弟になる。

清水由美子（20）・・・清水公爵夫人で先代の長女。母は正直の母方の叔母なので正直の従姉になる。

前田偕子（16）・・・聖徳公爵の十女で国子の異母妹。前田侯爵夫人。

池袋康民（15）・・・聖徳公爵の五男で国子の異母弟で池袋伯爵の養子。

池袋従子（18）・・・池袋伯爵の次女で康民の妻。聖徳貴子（12）・・・聖徳公爵の十一女で国子の異母妹。

柏原貞元（15）・・・柏原侯爵の嫡男。

柏原雅子（14）・・・柏原侯爵の五女。

夏休み初日（後書き）

とりあえずこんだけの人数が西松家にいます。

夏休み

「しかし何でこんなにうちに来たわけ？」

「明日は土曜でしかも学生の人は夏休み初日だから」

「まあ随分暇人が多いこと」

「いや、西松の縁戚である我が家にとつても一大事です」

「そもそも家柄華族であるかぎり皆縁戚じゃないの」

「それを言ったらおしまい」

「まあ結婚相手自体が限られているから・・・」

そんなこんなでその日は何も進まなかった。

翌日、王宮に隣接する都庁の庭で異変が起きた。

「ここがエイジ429年か・・・」

「いや、まだ429年とは限らないわ」

「とにかくこの時代が何年何月何日か確認しないといけないしここがどこなのか確認しないといけないです。」

そう話しながら壮年女性と中学生ぐらいの少年と少女は辺りを調べた。

未来からきた者たち

壮年女性の名は鹿島国子。鹿島公爵夫人で西松侯爵家出身である。少年の名は神武宜尊。国子の長女理恵子と神武映尊の長男である。少女の名は聖徳直子。聖徳公爵家出身で宜尊の婚約者である。

三人はいずれもある人物を追って未来からやってきた。

その人物は菊池夕夏（またの名を三枝有花）といい数世紀に渡って世界中を破壊し世界人口はこの時代に比べ十万分の一近くに減ったのだ。

当然国子たちは生まれた時から死と隣り合わせの生活を強いられてきたのだった。

そんな中国子は何とか夕夏の弱点を探ろうとタイムマシンを完成させた。そんな中理恵子は国子特製のバズーカで自分の命と引き換えに夕夏を倒す。しかし夕夏は何かではあるが生きていた。そして国子のタイムマシンを奪いこの時代に渡ったのだ。

国子は身内の死に慣れているとはいえ大変ショックを受けた。そしてタイムマシンを再び作る。

皮肉なことであるが夕夏がいなくなったことによりエネルギー状況が良くなり最初のタイムマシンを作るのに20年近く、チャージに5年がかかっていたが次のタイムマシンは作成に26日、チャージに4日しかかからなかった。

そして宜尊と直子を連れてタイムマシンに乗り夕夏が着いた時代に旅立ったのだ。

写真でしか見たことのない平和な時代。廃墟で暮らしていた三人にとってまさに幸せの象徴だった。

「ここは王宮？」

実は王宮に隣接する都庁と市役所は夕夏により王宮に改造させられていて王宮だけはかなり古いものも立派な建物が残っていた。

夕夏が宜尊の先祖から王統を奪って以来夕夏の子孫が帝だったが誰

も夕夏の子孫を帝と認めず映尊を帝扱いしていた。

しかし映尊もやはり先月夕夏によって殺されたのだった。

何百年も文明の発展が停止していたため夕夏独裁政治となっている以外はこの60年後以降から何も変わっておらずさらにいえばこの世紀自体進歩が殆どないので（それも夕夏のせい）違和感を持たれることは殆ど無かった。

しかしただひとつ違うことがあった。

「ひ、150円!？」

直子が自販機のコーラの値段を見て驚く。実は未来は夕夏のせいでインフラが酷く同等品で15万円の値段がしたのだった。が、直子は困った。

「私、一万円札しか持っていない・・・」

自販機は小銭と千円札しか使用できず一万円札しか持っていない直子は困惑した。が、それ以前の問題があった。

「直子、この時代の札と俺たちの時代の札の番号が同じだったらどうする」

そついうと宜尊は貯金箱を取り出す。

「この貯金箱には430年以前の小銭が入っているぞ。まあ430年のやつは使えないけどな」

「私が長年集めた古小銭を自分の手柄にしないで」

国子はタイムマシンを作るのと並行して過去に行く時のために昔の小銭（主に500円玉）をかき集めていた。

そして年代ごとに集めて今回は430年以前の小銭を持参したのだった。

総額は500万円程度で現代なら結構な金額だが未来だと一概に言えないが5000円程度の価値であった。

ちなみに430年以降のものも含めてかったお金は数億円である。まあタイムマシンの一機百億円に比べるとたいしたことはないが。

「でもちゃんと使えるのだろうか・・・」

直子は取り合えず自販機でコーラを購入した。ちゃんと500円が

入り350円のおつりがきた。

「150円だけど普通のやつよりおいしい！」

あらゆる食物は夕夏のためにまくなりまともなものは全て夕夏が搾取していた。コーラの高級品などあまり聞いたことがないがとにかく未来のコーラは現代よりまずかつたのである。

そして3人は吉。家に入った。未来の時代にも吉。家はあつたがやはり現代より高くまづくなっていた（それでも安くそれなりの味だったが）。

3人は牛丼に満足して吉。家をあとにした。

そして地下鉄に乗り込むが全部自動改札なので驚く。

実は未来はエネルギー不足で自動改札は電子マネー用に1つあるだけであとは全部駅員改札だった。

また人口の減少のため皮肉にも通勤地獄は解消されていたのだった。さらにいうと夕夏により学校制度が崩壊してサラリーマンクラスの間人は少なくなっていき、それにより秩序が乱れ後述の理由もありかなりの人間が風俗業に従事していた。

夜が近づくにつれて3人は困った。それは現代があまりにも都会過ぎて寝るためのタイムマシンの置場所が見つからないのである。

未来だったら適当なクレーターや廃墟に置けばいいのだが現代はそういう場所が見つからない。

また3人は現代ならいない存在になっているのでちゃんとしたホテルに泊まるわけにもいかず健康ランドに泊まることにした。

これに難色を示したのが宜尊である。実は未来の健康ランドは男性にとつてはある意味無法地帯で強姦される可能性が高かつたのだ。

特に宜尊のような少年など格好の餌食だった。

なぜそのような状態になったかという夕夏は自分の子孫繁栄のため女性を誘拐して自分の子孫を産ませていたのだった。

なので女性が一人で夜道を歩くのは非常に危険だったが逆に繁華街は安全というねじれ現象が生じたほどである。

また女性の減少に伴い独身男性が大量発生して、同性すら性欲の対

象になり特に若い少年は餌食になるのである。

それに伴い男女とも風俗で働く者が大量発生して、独身男性が益々増加するという悪循環が続くのである。

現代では大半の華族が嫁（あるいは婿）のほうで格上の家柄だった未来では格下の嫁（あるいは婿）のほうが増えてきているのである。また男性は途中で伴侶を失っても再婚は絶望的だが女性は生理がある限り無理矢理でも再婚させられる状態である。

ちなみに直子の母は三回結婚していて直子の父は二度目の夫である。いずれも夕夏によって死別させられている。

さらに人口減少と独身男性の増加は華族も例外でなくある人物が複数の家の当主になっていることもあり例をあげると直子の兄は直子の母の実家の跡も複数継ぎ直子の他の兄弟妹たちは直子の父が受け継いだ別の家の跡をそれぞれ継いでいるのである。

しかし妹たちや既に結婚した長男兄はともかく次男以下の兄弟は直子の母の男兄弟のように一生独身（といっても全員若くして夕夏に殺害されたからだ）の可能性が否定できず直子が複数の男子を出産した暁にはその男子が跡継ぎになる。

そして嫁として引く手あまた直子の妹たちも夕夏に誘拐される可能性もあり実際国子の娘で理恵子の妹も誘拐されている。

国子や直子はゲームで遊んだりマッサージを受けたり沢山美味しいものを食べたり楽しんでいたが宜尊はいつ犯されやしないか非常にヒヤヒヤしていて仮眠室で一睡も出来なかった。

未来からきた者たち（後書き）

鹿島国子（40～50代？）・・・故鹿島公爵夫人で西松侯爵令嬢。名前の由来は先祖である国子から。幼い頃から命の危険にさらされて殆どの家族を失う。開発研究所の所長であり夕夏を倒すためにタイムマシンなどを開発してきた。しかしタイムマシンを奪われて再度作り直して現代にやってきた。

神武宜尊（10代）・・・国子の孫で本来の帝。国子に連れられて現代にやってきた。

聖徳直子（10代）・・・聖徳公爵家（宗家）令嬢で宜尊の婚約者。やはり国子に連れられて現代にやってきた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3609y/>

化け猫伝説

2011年12月2日18時52分発行